想像界の生物相

風変わりな姿をした イッカクとユニコーン

民博 人類文明誌研究部　池谷（いけや） 和信（かずのぶ）

資料名｜イッカククジラの牙
標本番号｜H0278376
地域｜北極圏
サイズ｜長さ 181㎝×直径 2.5 ～ 4㎝

資料名｜『ドン・ファン・デ・アウストリアの動物誌』
資料 ID｜F112002561（ファクシミリ版）
出版年｜原本は 1570 年ごろ制作
地域｜スペイン
サイズ｜縦 24.9㎝×横 19.5㎝（画像は一部を掲載）

◆◆◆ イッカクという生き物 ◆◆◆

民博本館の中央・北アジア展示には、イッカク（一角）の牙を展示している（右頁参照）。その長さはおよそ二メートルにおよびまっすぐに伸びており、先端のとがったドリルのようなものだ。この牙は、イッカクの雄のみがもち、歯が変形したものであるというが、いかにも角のようにも見える。牙を展示した意図は、ロシアの極北の民がかつてはイッカクの肉を利用してきたが、漢方薬の材料として牙の商品価値が高まり乱獲された事実を紹介することにある。

イッカクの形を模したおみやげ品

さて、イッカクはクジラの仲間である。夏のあいだは北極海の海岸近くを回遊するが、冬になると海の凍結が始まるので、海岸から離れた海域に移動する。イッカクの食料はタラなどの魚であり、イッカク自体はホッキョクグマなどに捕食される。七月初めに、わたしは、パリの国立自然史博物館にてイッカクの展示を見る機会があった。数頭のイッカクが、北極の海で群れをつくり気持ちよさそうに泳いでいる映像を見た。地元のハンターは、ノコギリのような細長い一本の牙が奇妙に見えるので、イッカクをすぐに見つけていた。売店では、イッカクの形をしたおみやげ品が売られていた。

◆◆◆ 牙と角との共通点 ◆◆◆

一方で、紀元前以来、ヨーロッパの人びとはユニコーンとよばれる奇妙な動物がいると信じ、右頁の写真のような中世の動物誌では、実在の動物と並んで登場した。その後、イッカクの存在が知られると、ユニコーンとよばれた伝説上の動物の角としてイッカクの牙がもたらされた。ユニコーンは、まっすぐで非常に長い一本の角が額に生えている馬のような姿を示す生き物である。尻尾をもち四つ足で歩き、口の下のひげはヤギのそれにも類似している。その生き物は、きわめて獰猛（どうもう）であり飼いならすことはできず、長い角を武器にしてゾウを倒すこともできるというのだ。角には蛇などの毒で汚された水を清める解毒作用があるとされた。獰猛とされながら、娘のふところに抱かれる場合にはおとなしくなるといい、その場面は中世から近世にかけて絵画やタペストリーの題材とされてきた。

大航海時代以降、ヨーロッパ人たちが北の海にも進出すると、ユニコーンの角と形が類似していたイッカクの牙が注目された。それにもまた解毒作用があるとみなされ、多数の牙が売買目的で乱獲されることになった。江戸時代に、日本ではオランダ商人をとおしてイッカクの牙がもたらされ、「ウニコウル」とよばれ、貴重な薬として流通した。一七一三年に刊行された百科事典である『和漢三才図会』には、イッカクが紹介されている。このように、ユニコーンは紀元前から知られた想像上の生き物ではあるが、ユニコーンとイッカクの牙にあらたなつながりが生まれたことによってイッカクの頭数が減少したという事実を忘れないでおきたい。